
魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～

真理亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは絆の転生者

【Nコード】

N2046X

【作者名】

真理亜

【あらすじ】

美響　光羽は大切な人を幸せにする事しかできず死んでしまっ
た…、
そんな光羽を見た神は次の最高神を決める代理戦争に誘われリリカルなのはの世界に転生した
彼は一体その世界で何を見るのか、また生き残る事が出来るのか。

プロローグ（前書き）

こんにちは 真理亜です

ここ最近なのはの2次創作にはまったので作ってみました

駄文ではありますがそこら辺はまあ勘弁してください

では魔法少女リリカルなのは〜絆の転生者〜始まります

プロローグ

青年には大切な友達がいて…、大切な親がいて…、大切な人がいた…、

青年はそんな大切な人たちを幸せにしようとした、

友達に好きな人がいれば何とかしてその恋を实らせ、
その人と友達になった。

また困ってる人がいたなら無償で助け
その人とも友達になった

そうして広がった青年の絆はある日突然一瞬にして砕けた

「さあ今日も張り切っていきますか!!」
青年こと美響 光羽は朝から張り切っていた

「じゃあ父さん・母さん行ってくるよ」
そう言うと彼は学校までの道のりを目指し走った

しばらく走っていると
プウーーーーー!!!!!!

突然トラックが視界の端に現れたその瞬間視界が黒く染まった
最後に青年は思ってしまった

俺の幸せはどこにあるんだろう

「ふ やれやれえらい目にあつた」

光羽は起きると自分のいた場所に驚いた

自分の死体が隣にあつたのだ

「くそつ何なんだよ俺つて奴はこんな死に方じゃ死に切れねーよ！
」

その顔には涙が流れていた

数日後 青年の葬式が始まつた

そこで青年は驚いた

そこに居たのはかつての親友や小学校以来会つてない人それに一回しか助けた事のない人までも来ていたのだ

実際青年は街ではかなり有名で「無償の恩人」としていろんな人から親しまれていた

彼の葬式が終わるとそこにいた人たちは青年の話で盛り上がつていた、
来てくれた人達は美響 光羽と言う人間を通して他の人たちとの絆ができていた

「ああ俺は今この時のために生きてきたんだな」

その時の青年の顔は笑顔だつた

「さてそろそろ行くか・・・」

青年は名残惜しそうに成仏するところを

「その魂ちよつとまった！！」

突然空から女性の声がした

「その生きざまに感動した！、だから転生してもらいます！」

突然変な事を言っていきた

「あのー話が見えないんですけど、とりあえず出てきてくれませんか？」

そう言うと金髪の美しい女性が現れた

「ああ申し遅れてすみません私はディオオーネーと言い天空の神をやっています」

突然の事に驚いたのか光羽は目を見開いていた

しばらく話すとどうやら次の最高神を決める戦うらしいのだが、

神同士が戦うと世界が壊れかけないので、

各々代理の死人の魂を見つけ他の世界へ転生させ代理として戦わせる事になった

その代償に願いを一つと転生後の世界での一生と言う物だった。

「さて引き受けてくれますか？」

ディオオーネーが聞いてきた

「なんで俺なんだ？」

光羽はいまだに自分が選ばれたのかが分からない

「そりゃあ君の人生に感動したからだよ」

「まあいいか俺やりますよ！」

光羽はやる気十分だ

「じゃあまず最高神の所に行きましょう」

ディオオーネーはうれしそうな顔だった

ディオオーネーが指パッチンすると

いきなり神殿の前に着いた

中に入りしばらくすると

イスに座っている神様らしき人がいた

「ディオオーネーただいま戻りましたゼウス様。」

光羽はゼウスを見てその威厳に飲み込まれそうだった

「ほう君がディオオーネーが連れてきた代理人か」

しばらくディオオーネーとゼウスが話し込んでしばらくすると

「美響 光羽君の人生見させてもらった、なるほどディオオーネーが選んだ理由がよく分かった」

ゼウスが光羽に話しかけてきた

「転生する前にこの代理戦争のルールを教えよう」

そう言つてゼウスからこの戦争のルールを教えて貰つた

- ・転生者は全部で50人ほどいる

- ・全員を殺すか他の転生者の身に付けている何かを貰う

- ・転生後の世界では何処で何時送られるのかは運次第

- ・転生後の世界では最高神が創つた物がいくつがある

- ・始まる時の開始年齢は全員6歳

- ・全員ゼウスから能力を1つ貰える

「とまあこんなもんだOK？」

ゼウスが気楽に聞いてくる

「分かった後いくつか質問がある」

「どンドン聞いておくれ」

ゼウスは何気にドヤ顔

「まず転生する世界はどこだ？ 後貰える能力は選べるのか？」

光羽は自分が気になっている事を聞いた

「転生先はリリカルなのはじゃ、これはわしの趣味じゃ！」

またしてもゼウスはドヤ顔

「後能力については君の人生で決まる、君の人生だと心剣士じゃな」

光羽は納得したような顔だった

「じゃあ最後に一つ願いを叶えてくれ」

「ふむいいだろう願いを言え」

「じゃあ前世の皆に「また会おう」「って言っといってください」

そっとう光羽の目には若干の涙があった

「分かったではその門をくぐるといい」

ゼウスは内心（ええ子じゃの〜）と思った

そいつは光羽は新たな世界へ行くのであった・・・

プロローグ（後書き）

はいと言う事で今回はこれにて終わり

何か至らない点があれば言ってください

次回「拾い拾われ執事君（仮）」よろしく!!!

拾い拾われ執事君（前書き）

ども〜真理亜です^^^

第二話「拾い拾われ執事君」ですども〜

拾い拾われ執事君

光羽side

「転生する世界はリリカルなのはじゃ」

そうゼウス（神）に言われた俺は悩んでいた

何せ俺はリリカルなのはの世界を全く知らないのだから

（たっ確か管理局の白い悪魔が魔王でO H A N A S H I だっけ？）

俺は生前の頃友達からそんな事を聞いていた

（まあ管理局の白い悪魔とやらに合わなければOKだな）

俺は自分の中で結論を決めるとゼウスは能力を教えてください

「君の場合は心剣士じゃな」

俺は自分の記憶で心剣士の能力を思い出した

（確か他の人の心を剣にするんだっけ、でもその人の友好関係がなければ発動しないんだっけかな）

俺は自分の能力を確認すると最後に願い事をかなえてもらうことにした

「皆に「また会おう」「って伝えておいてくれ」

俺は生前の大切な人たちに自分の気持ちをたっただ一言伝えたかった

「ではその門から行くといい」

ゼウスは俺の隣にある門を指差した

何も言わず俺はその門をくぐると俺の視界が白で埋め尽くされた

しばらくすると視界が晴れ周りを見ると

「なぜだあああああああああああああああああああああああ！

！」

おもわず叫んでしまったなぜなら俺は今空を飛んでいるからだ

「助けて!!」

飛んでいる途中に女の子の助けを求める声がした

光羽out

すずかside

私月村すずかは今どこか分からない場所に幽閉されています

さかのぼる事3時間前

私は今日で6歳の誕生日でこれから家に帰る所お

「月村　　すずか、だな悪いが来てもらおう」

行きなりサングラスを掛けた男の人に腕を掴まれた、

私は逃げようとしてもがいたのだが男の力が強くあまり動けなかった

その後車に乗せられ今に至る

(なんでこんな事になったんだろう)

私は最後の力を振り絞り叫んだ

「助けて!!」

しかし誰も来ない来るのはさっきの仲間だと思う人

「子供だと思っでいい気になるなよ!!」

男は私の服をつかみ殴りかかろうとしたとき

パライイイイイイイイイイイン!!

突然窓が割れたのだ

そしてそこに現れたのは私と年齢があまり変わらない甘栗色の長め

の髪をした男の子がいた

「その子を離せ！！ その子は今嫌がってたろ！！」

突然の事に私はその子を見るしかできなかった

すずかout

光羽side

「その子は今嫌がってたろ！！」

俺は声が聞こえた場所に落ちると殴りかかるうとする男がいたそれを見たら口が勝手に動いた

「ああなんだよがきのくせに！！」

男は俺に殴りかかるうとした

かわすつもりだったが殴られた、俺は女の子がいる所まで吹き飛ばされた

「あのー大丈夫ですか？」

女の子が聞いてくる

「大丈夫だよそれより今はここから出よう」

俺が立ち上がり逃げようとすると

「誰が逃がすかこのがきが!」

男がまた殴りかかってきたその手にはスタンガンが握られていた

「ねえ君の名前は?」

俺はそんな男を無視して女の子に聞く

女のこは少し戸惑いながら

「私は月村　　すずかです」

それを聞いた俺は

「言い名前だね、俺は美響　　光羽だよ、よろしく」

名前お言い終わった後

「うぜえんだよ!」

男の拳が目の前まで迫ってきていた

それを俺はしゃがんでかわし落ちていたガラスの破片で男の手に刺した

「うおおおお」

男が痛がっていたその際に

「すずか逃げよう!!」

とっさにすずかの手を引いて外に逃げた

しばらくの間俺たちは走っていた

「ここまでくればまあ問題ないだろ」

俺たちは道が狭い路地裏に逃げ込んだ

「それにしてもここは何処だ？」

光羽out

すずかside

「すずか逃げよう!!」

突然私の名前を呼ばれ手を引いた事に私は今までにないくらいドキドキしていた

「それにしてもここは何処だ？」

その言葉を聞いた私は途端びっくりした

「ええじゃあ美響君は何処からきたの？」

「まあ空からかな、あと光羽でいいよ俺もさっきすすずかっつて言っちゃたから」

その言葉に私は驚く事しかできなかつた

私はとりあえずケータイで姉に連絡をいれ事情を説明すると

しばらくして姉が車で迎えに来てくれた

「あらあら仲が良いのね」

姉の目線はなぜか私の手を見ていた

気になって見てみると私と光羽君の手が繋がれていた

私は思わず手を離していたけど

このときの私の顔はきつと真っ赤になっていただろう

すすずかout

光羽 side

しばらく俺は月村（姉 忍さんと言っらしい）の車に乗っけられた
まま月村家に向かう事になった

月村家について俺は一通りはなした

もちろん神の代理戦争の事は言わず

名前以外の記憶をなくしなぜがいきなりスカイダイビングした事

しばらく黙りこんだ忍さんは

「ねえあなた執事にならない？」

とんでもない事を言ってきた

続く？

拾い拾われ執事君（後書き）

はい今回ここまで読んでくれてありがとうございます

すずかのキャラがあまり分からないorz

まあそこら辺は原作見ながら何とかしていきます

感想よろしく!!

次回「吸血鬼つて要は人間」

吸血鬼Ⅱ人間（前書き）

はいどうも真理亜です

この前感想をいただいたところ

自分もまだまだ だと思いました

まあそんな事より心剣士の説明です

・パートナーと心が通じあった時に心剣が出てきます

・心剣には様々な効果があります

・心剣をパートナーに刺すことでパートナーの深層心理に入りこめる

まあこんなもんですかね

近い内に紹介文を書きたいと思います

ではござ

吸血鬼Ⅱ人間

光羽 side

「執事にならない?」

彼女はいつたい何を言っているんだろうかおもあず

「なぜだあああ!」

叫んでしまった

「だって俺どう考えったって不審者ですよ」

しまった!!自分で自分の事を不審者と言ってしまった!!

「だから記憶が戻るまで家でいったん預かる間執事として働いてくれないかしら」

「少し考えさせてください」

近くの公園に行きしばらくブランコに座っていると

「やあ、こんな時間に夜遊びですか？」

俺と同じ年ぐらいの黒の長髪の少年が話しかけてきた

「まあ多分ですけど君も転生者ですよね」

「……………」

「まあ待つてくださいい君とはまだ戦いたくないので」

目の前にいる少年はニコニコしながら言っている

はつきし言って俺はコイツの事が分からないのだ

なぜかと言うと何も見えないのだ、表情では笑っているけど感情・
考えていること・全くもって見えないのだ

「何も喋らないのもいいですけど、とりあえず後ろの人たちはどう
にかなりませんかね？」

後ろ？ 後ろを振り返るとさっきすずかを襲った連中が公園に入ってきた

「じゃあ僕はこれで、ちなみに僕の名前は風香です、また生きて会いますよう」

そう言うと彼の姿が吹いた風に溶け消えてしまった

さて問題はこの連中だ

しばらく考えこんでいると

「光羽君外は寒いから中に入ろう。」

「待てすずかこっちに来るな！」

最悪の場面ですずかが来てしまった

「お前ら何故すずかを襲った目的はなんだ！！」

俺は何故すずかを狙ったのか目的を聞くと連中のボスらしき男が出て

きた

「目的？ そんなの決まってるじゃあねえか掃除だよ」

「てめえは知らないだろうけどその嬢ちゃんは吸血鬼なんだよ」

「だからおとなしくその嬢ちゃんをこっちに渡しな」

すずかの方を見ると震えている

「……お前達はそう言って何人殺してきた」

「ああまず手始めにその嬢ちゃんの両親を殺した、あの時は最高だったぜ、両親は強かったがまあボスが倒してくれた」

（こいつがボスじゃないのか）

「だから死にたくなかったたら おとなしくその化け物をよこしな、その嬢ちゃんはこの世にとってゴミだ！！人間じゃない」

その時の俺はキレた

「違うだろ！！ 何が吸血鬼だ！ 生きてるんだ！ それだけでもう人間だろ」

「吸血鬼と言う鎖にすずか今まで必死に耐えたはずだ！それをゴミ扱い何かすんじゃねえ！」

「光羽君……………」

すずかは光羽の方を見ている

「だから……………」

「そんな人間として生きてるすずかを「化け物」など「ゴミ」などと言うお前達を俺は許さない！！」

「たとえばすずかは吸血鬼だとしても……………」

「世界が敵に回っても・・・」

「俺はすずかと言う一人の女の子を守って見せる!!」

「・・・ありがとう光羽君」

すずかが答えた瞬間すずかの腹のあたりが光輝き剣の柄が出てきてそれを持った瞬間彼女の背をつて居るものを知った

「優しく皆の心を救うそんな思いの中に隠された真実それは重い鎖で縛られている」

剣を引き抜く後景を見ている連中は全員啞然としている

「吸血の剣、ブラット・リュウゲ」

手に持った銀色の短剣の真中に赤い宝石埋め込まれが柄に鎖が繋がれていて鎖の最後は銀でできた十字架になっている

すずかもこれにはびっくり仰天だったらしく驚いている

「そんな見せかけの剣出されたって怖かねえ!!」

男がスタンガンを手に持ち突っ込んで来た

「ああ体が軽い」

突っ込んできたボスの肩を掴みきれいな放物線を描きながらジャンプした

俺がジャンプした後男の腕には鎖が巻かれていた

その鎖を引くといとも簡単に男が宙を舞った

鎖で繋がれた男を残った連中の方に投げる

男が投げられた瞬間連中に隙ができる

「そこだっ!!」

俺は瞬間男達の方に走る

解いた鎖で男達を威張り上げ

「さあもう終わりださっさといなくなれ」

連中を公園から追い出す

「見てたぜやるじゃねえかガキいや転生者と呼んだ方がいいか？」

金の短髪（見た目ギルガメシュ）背中に長剣を背負っている18歳
ぐらいの青年が入ってくる

「お前は誰だ？ 転生者なのか？」

「俺はそこに居る奴らからボスと言われた男で転生者の竜崎 蓮、
能力は「剣術の才能」と言うものさ」

おいおいそんなことまで教えていいのかよ

「ちなみに貴様はガキか転生者どっちで呼ばれたい？」

「いや… 呼ぶ必要はない！」

俺は蓮に短剣を投げた

「全く最近のがガキは危ないな」

蓮は短剣をよけ鎖を素手で掴むと

「返すぞ」

蓮は俺よりも速いスピードで短剣を投げてきた

俺は慌ててよけるしかし短剣の先端が俺の頬をかすめる

「なぜだ何故すずかの両親を殺した答える!!」

「なに この世界に来て退屈だった只それだけの事だ」

「たったそれだけで殺してきたのか・・・」

「ああそつだそれ以外の理由など・・・ない!!」

次の瞬間俺の持っている短剣と蓮の持つてる長剣がぶつかりあった

吸血鬼Ⅱ人間（後書き）

はい第三話でした

光羽君6歳に見えないどうしよ

まあ前世の年齢が18歳ぐらいだからいいよね

書く事がないので次回のネタを皆さんで大切り大会したいと思います

突然俺の目の前に現れた謎の人物

????「大丈夫かい？」

光羽「○○○○○○」

この○○○○○○に当てはまる言葉を入れてください

おもしろかった人を採用します

ではまた

風の主は結構強い(前書き)

どうも真理亜です

今PCが修理中だから携帯からの投稿です

なので更に誤字脱字があるとと思うのでよろしく

風の主は結構強い

ガキイイン！

幾度となく剣が重なる

暫くすると光羽が徐々に不利になる

(このままじゃまずい)

そう思った時

「つまんね〜なお前弱すぎだからお互い次の一撃で決めようや…本気で来い！」

「分かった…すずか君の心を貸してくれ」

「光羽君頑張つて」

すずかに応援して貰った光羽はいきなり自分の手に血がつく程度の傷をつける

自分の血を短剣に垂らすと短剣の刃はルビーよりも紅い色になった

「はっ！それがてめえの力か…良いね！」

葉っぱが二人の中央に落ちる次の瞬間

「レクイエム！」

「秘剣！燕返し！」

今まで斬撃の中で一番でかい光が出た

剣が重なり有った場所には傷だらけの光羽と膝を地面に着いた蓮がいた

「今のは良い一撃だったぜ小僧」

「ハアハア」

「今の一撃を讃えお前の知らないこの世界のルールを教えてやる」

「何だと」

「この世界には元の世界のアニメキャラがいるしかもほとんど戦闘力が高いキャラばかりだ そいつと戦って勝つとそいつの武器か戦闘モーションを手に入れる事が出来る」

「なんだと」

「さて今日は辞めだ疲れた」

蓮が帰ろうとする

ヒュン

風が吹く

その瞬間

ブチャ

蓮の腕が切れる

「見ちゃ駄目だすずか！」

光羽がすずかの目を塞ぐ

「全くこんな所で戦つのを辞めないで下さい」

「てめえ……」

「蓮さんあなたにはがっかりしましたもつと戦って下さいよ」

風香が突然現れるだがその顔はさっき合った風香の顔ではなく残酷な顔だった

「君達が街中でドンパチやるから僕が結界を張っていたんですよ」

「そう言えばこんなに派手にやってるのに誰も来ないな」

「なのに戦いを辞める何て…蓮さんには失望しました死んで下さい」

「まで！殺すな！」

光羽は風香に言う風香の動きが止まる

「すずかちよと目を閉じて耳をふさいでて

「ねえ居なくならないでね

「ああもちろん」

それだけ言つとすずかが目とみみを塞いだ

「どいてくださいそこに居たら君が死にます」

「駄目だ殺すのはよくない」

「仕方ないですねじゃあ君に死んで貰いましょう本当は君との戦いはもっと後が良かったんですけど…仕方ないですね」

風香が挙げた手を振り下ろす
その瞬間一筋の風が光羽を襲う

光羽は先の戦いで疲れてその一瞬行動が出来なかった

「小僧お前はまだ死ぬな」

突然光羽の前に蓮が立ち持っている長刀で風を受け止める

「お前傷は良いのか？」

「こんなもん唾を付けとけば治る」

そう言ってる蓮は言葉とは違って何とか意識が保ててる状態だった

「まさかまだ動けたなんて思っても見ませんでしたよ」

再び風香は手を上に掲げる

その瞬間

「そこまでだ！ 双方武器を納める！」

突然空から声が聞こえる上を見ると何やら防護服を着た40ぐらいの男がいた

「管理局ですか…」

「面倒臭そうだなー」

そう言って風香と蓮はどこかに行ってしまった

「大丈夫だったかい？」

「貴方は？」

「俺は時空管理局局員のフレイル・バートン 転生者だよらしく」

月日は流れもう2年後(前書き)

お久しぶりです魔理亜です！

久しぶりの投稿ですではどうぞ

月日は流れもう2年後

side 光羽

長かった・・・

俺がこの世界に来ていきなりほかの転生者と戦い何とか生き残れた

あの日

「俺は時空管理局局員のフレイル・バートン 転生者だよろしく」

「さて提案だがこれから俺たちと手を組まないか？」

「えっ！」

話のぶつ飛び具合に驚いてしまった

「..びびる..」

「とりあえず詳しい話を聞かせてもらえませんか」

おはなし中・・・・・・・・

「つまり何人かでチームを作り他の転生者達を倒した後残った人達で戦い勝ったその人をこのゲームの勝者と言うことですか・・・」

「まあ大体そんなもんだ、でどうする？」

「分かりました、これからよろしくお願いします」

「よきたじやあれからミッドチルダにいこう」

無駄にはしゃぎすぎだろこのおっさん

「すみませんが行く前に少しお世話になった人たちに説明したいので少しの間待ってってください」

「おついいぞ」

その後すずかや忍さんたち親族が見つかった事を説明し

すずか家の家を出て行ったその時のすずかの顔は少し寂しそうな目だった

時間の流れは速くあれから2年の時がたち
俺はフレイルのおっさんと修行に明け暮れていた

ちなみに今いる部隊はフレイルが作った転生者だけの部隊である隊員の年齢はさまざまであり
俺は最年少

なぜか転生者は魔力値が高い平均でS+
ちなみに俺はSSだ
なんでも転生する際に神の力が加わっいてその影響らしい

仕事と言ってもロストロギアの封印だったりする
ちなみに神が作った物もロストロギア扱いになっている

そう言えば俺のデバイスってまだできてないんだよなー
そう部隊の中でデバイス無は俺だけである
じゃあどう戦うかって部隊の人から心剣を抜かせてもらいそれで戦

うのがやっと

そんなある日

「おい光羽ー」

「なんですかジュンさん」

同じ部隊の人が話しかけてきた

「お前とすずかは同じ年なんだよな」

「はぁそうですねども」

「じゃあもう原作が始まるな」

「マジっすか!?!」

「まじまじ大マジ」

「でもそうなるときっと「俺が転生オリ主だ!」って奴が出てくる
だろうな」

「あのよく二次創作で出てくる奴ですよね」

「ああ無駄にハーレムを作っちゃるって言ってる輩がでてくるな」

その事をフレイルのおっさんに言うと

「よし分かったではみんな地球に行こうではないか」

「「「「はあ!?!」「」「」」

思わず部隊のみんなではもってしまった

「異論は認めん!?!」

相変わらずおっさんは元気だな

「しかしもうそんな時期か・・・」

「では出発は3日後まあ長期休暇だと思ってくれ」

「後光羽は残っておいてくれ」

「では解散!！」

みんなが帰る中俺はおっさんに言われたとっさり残った

「で用事はなんですか」

「まあそんなこと言うなよ」

そう言いながらフレイルは歩き始めた

「一体どこに行くんですか？」

「お前にもデバイスが必要だと思ってなまあついてこい」

ついた先は無尽書庫だった

「フレイルさんこんなでこんなところだ・・・」

「まあついてこい」

フレイルが本棚を漁っていると

「おっこれだこれ」

1冊の本を取り出した

「なんですかそれは」

「これは光天の書と言って古代ベルカで作られた夜天の書の対になる物だよ」

「だけどこれには欠点があつてね」

「開かないんだ」

「なんでそれを俺に？」

「それには俺の考えがあつてだな」

「文献によるところこの書は意志がありそれが分かるとしたらお前の心剣士としての能力だけなんだ」

「まあ物は試しだよってみろ」

若干嫌だがまあ物は試しと言う事で光天の書に触れてみた

するとなぜか頭の中に映像が流れ込んできた

とてもとても悲しい映像

1 人目の王はただ死んでゆく兵士達を見ることができなかった
人はそれがとても辛かった

2 人目の騎士は戦いのさなか愛しい人を失い悔やんだ

3 人目はただの人間だった。ただが村を滅ぼされ、それが悔しく力を手に入れた。がその力が他の人が悲しませたことに悲しんだ。

4 人目は世界が敵に回っても一人の少女との願いを叶えようとした。が駄目だった。それが悔しかった。

5 人目は燃え行く城の中、自分の不甲斐無さを悔やみ、悔しがり、悲しみ辛かった。

そんな映像

「おいお前泣いてるのか」

フレイルが聞いてくる

あれ俺泣いていたのか・・・

涙の滴が本に落ちたその瞬間

『マスターの認証終了しました』

いきな本が喋り出した

神々の雑談から始まるストーリー（前書き）

昨日に続き投稿ですではござ

神々の雑談から始まるストーリー

天界の神殿

「ゼウス様くようやく原作開始の時代になりましたね」

「そうじゃのディオオーネー、転生者の中では運悪く古代ベルカに飛ばされた奴もいるからのう」

神たちは古代ベルカが始まるところからみているので何千年も見ている

「そうです！、ゼウス様作った物はどうやって向こうに行くんですか？」

「それはのー向こうの滅びた世界の遺産やあるいは地下深く眠っているかまたは向こうに送ったアニメキャラなどが持っておる」

「そうですか？ちなみにアニメキャラと言ってもどんな人たちを送ったんですか？」

「なるべく戦闘能力の高い連中に行ってきて貰っておるわい、ちなみに勝負方法はなんでもいいから勝てばそのキャラの持つてる武器か能力を貰えるぞ」

「あつ後転生者にはそれぞれに似合った武器などがあるんですよ、ちなみに私の光羽君のははどういった物なんですか」

「質問が多いの〜そうじゃな転生者が転生した時点でわしがそ奴に似合った武器を作って送っておる、ちなみに光羽君は今さっき手に入れた様だぞ」

「えっそうなんですか！ これで光羽君はより強く私は最高神への一歩ですね」

「そうじゃなそれに光羽君はわしの注目してる転生者の一人じゃからな」

そんな他愛もない話をしてしていると

「ゼウス様私の代理を探してきました」

「おー遅かったのーオーデイン貴様で最期じゃ」

オーデインの隣に居る子をゼウスは見た

「なるほどの〜さすがは貴様ほどの奴が目にかけて奴じゃの〜」

「はいずっと気になって見てきました」

「まあよい、少年名を聞こう」

「私の名前は咲夜・・・七条 咲夜です」

「うむでは能力は・・・」

「では最後に願いを聞こう」

「私を原作が始まる頃に主人公達と近い年齢になるように後なるべく情報がたくさんあるところに一歳から転生させてください」

「まあよからう、では行ってくる」といい

そう言っつてゼウスは新たな転生者を見送った

ミットチルダ

光羽 side

「マスターの認証終了しました」

本から機械的な声が聞こえた

「おおやったな光羽これが君のデバイスDA ！！」

「はぁ・・・そうですか・・・」

「なんだ元気ないな」

「いやこれロストロギアじゃないんですか？」

「そうだけど俺たちの部隊は特殊だから一人一つロストロギア持つても大丈夫夫！」

(うわぁ！！無駄にウザ)

「そういえば俺たちの部隊ってどこの部隊なんですか？」

「3提督直属特殊部隊だよ言わなかったっけ？」

「言ってますんよ！！」

「そういえば言うの初めてだな この部隊だから平均魔力S+で全員レアスキル持ちが実現できるんだZO」

(なんかいつも以上にウザいな)

「まあそんなことよりデバイスの設定は地球に行くまでにしておけよ以上終わり!」

俺の指にはいつの間にか光天の書の待機モード指輪が中指に付けられていた

そんなこんなで管理局の男子寮に居る俺
ちなみに任務に出てるか金は貰ってるしかも結構な額
家を買えるが一人暮らしだから寂しいので未だに寮生活

「さてさっさと設定しますか」

「セットアップ」

そう言うと指輪が輝き喋り出した

「ひさしぶりです光羽君」

声の主はまぎれもなく光羽の担当の神ディオオーナーだった

「久しぶりです」

「では早速この本の設定に移りたいと思いますちなみにこの本作ったのゼウス様ですよ!!」

「まあなんとなく そうじゃないかなと思ってました」

「ちなみにこのデバイスの使い方は分かりますね」

そうこの本を手にしたときから使いは手に取るように分かる

「うんで光羽君はこのデバイスの名前と設定ボイスを決めてもらいます」

名前を決めると言われた時光羽はさつき見た映像を思い出した

「このデバイスの名前はどんな孤独にも負けない 希望の光
イ・ホープ」

「言い名前ですね次に設定ボイスはどうしますか」

「それは 緑川 光 で行きます」

「分かりました、でわこれで設定は終了ですお疲れさまでした」

「よろしくな ホープ」

「こちらこそよろしく頼むぞ、マスター」

くそっ！！無駄に格好いい声しやがって

地球・鳴海市

「今日も頑張ってジュエルシート封印するの！」

「あの高町なのはさんですか？」

地球出発まで残り2日

神々の雑談から始まるストーリー（後書き）

感想などお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046x/>

魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～

2011年11月24日23時58分発行